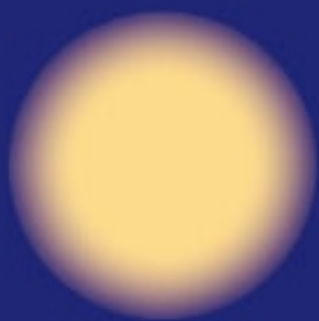




傷口に つづ けを

逢見るい・作
七色風香・絵

傷跡に口づげを

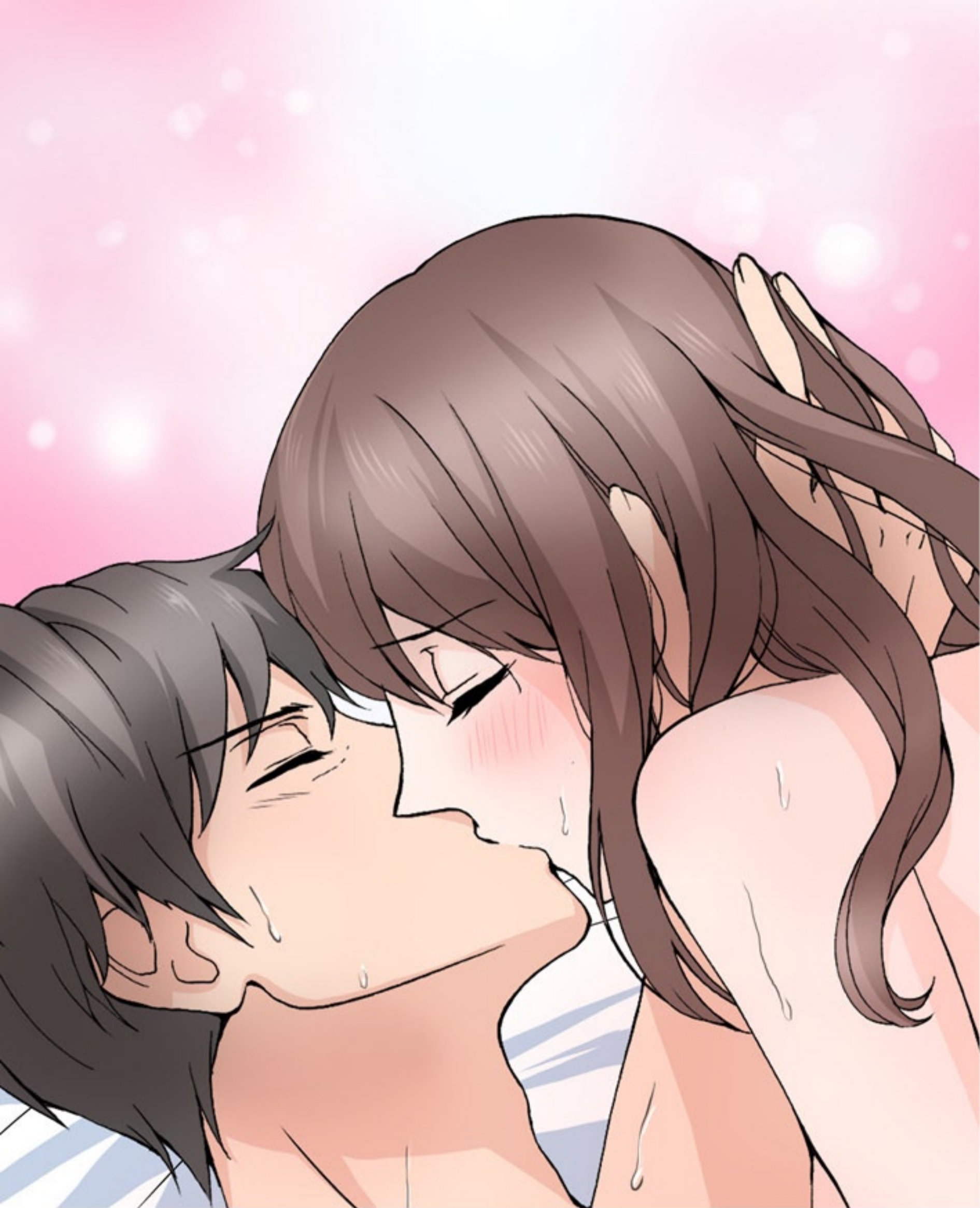


愛しているのだと、

錯覚さつかくしてしまいたいそうだった。

身体からだの心がしびれて、みるみる
蕩とろけてしまいたいそうだった。

もう少し、もう少しだけ……



職場の上司である鮫島さめしまと関係を
もつようになって、そろそろ一
年が経たつ。

つまり、わたしの中のタイムリ
ミットだった。

「終わりにしたいの」



わたしは一年以上、

同じ男とは付き合わない。

ひとりの例外もなく、

ずっとそうやって生きてきた。

「俺は、愛してたよ」

突拍子とつぴょうしもない言葉に、わたしは
思わず目を見開いてしまった。

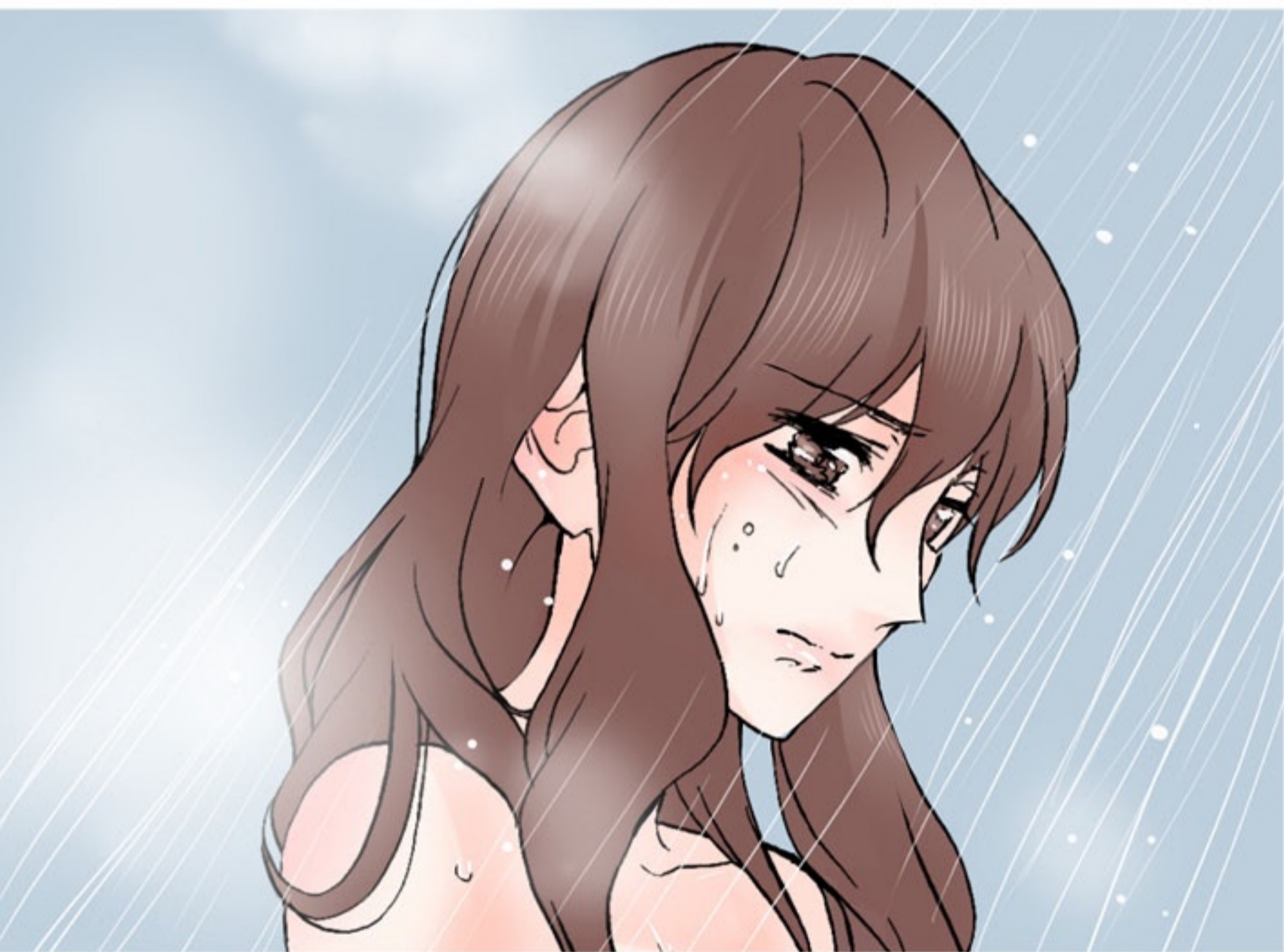
鮫島はこんな時まで無表情だ。

真顔でそんなことを言われ、
戸惑とまどってしまおう。

わたしもよ、と言つてほしかつたのだからか。

それとも、ただ困らせたかっただけなのか。

どつちにせよ、愛していたなんて、死んだつて言わない。



半^{なか}ば、愛しかけていたのかもしれない。鮫島のことを。

わたしの弱さを包み込むように抱きしめてくれたのは、鮫島だけだった。

けれど、ただの上司と部下に戻らなければ。

愛してしまいう前に別れを切り出せて、本当によかった。

わたしには、

本気でひとを愛する資格はない。

愛される資格も、もちろんない。



株式会社EMプラネット
月刊「スキャンダラス」

翌朝。

いつもどおりに出勤すると、

鮫島が、

ひとりの青年をともない現われた。

「次号から、読者ページや特集
記事で挿絵を担当してもらおうこ
とになった、かみしま神島くんだ」

ハッと息を飲んだ。

全身から血の気が引いていった。



「神島玲人^{れいと}です。これからお世話になります。どうぞよろしく
お願いします」

その場にいた全員が、玲人に歓迎の拍手を送っている。

たったひとり、わたしを除いて。

呼吸をすることすら忘れ、
苦しくなつて息を吐くと、
眩暈めまいでぐらりと視界が揺れる。

彼が、近づいてくる。

わたしの目の前までやってくる。

見惚みとれてしまうほどの、
優しい笑みをたたえて。



「久しぶりだね、ハルちゃん」

約十年ぶりの再会だった。

あの頃、わたしが二十歳で、
玲人は十八歳。

ふたりともまだ、
なにも知らない子どもだった。

ずっと会いたかった。

でも、会いたくなかった。

まるで、あの日と同じ、

愛しさと憎しみが入り混じった
ような目で、

玲人がわたしを見る。



やめて、穢けがさないで。

これ以上、
思い出を穢けがさないで。

「大丈夫だよ、ハル。
悠一ゆういちが死んだのは、
ハルのせいじゃない——」



わたしの隣となりの家に住んでいた
悠一ゆういちと玲人は、物心ついたころ
からの幼馴染おさなじみだった。

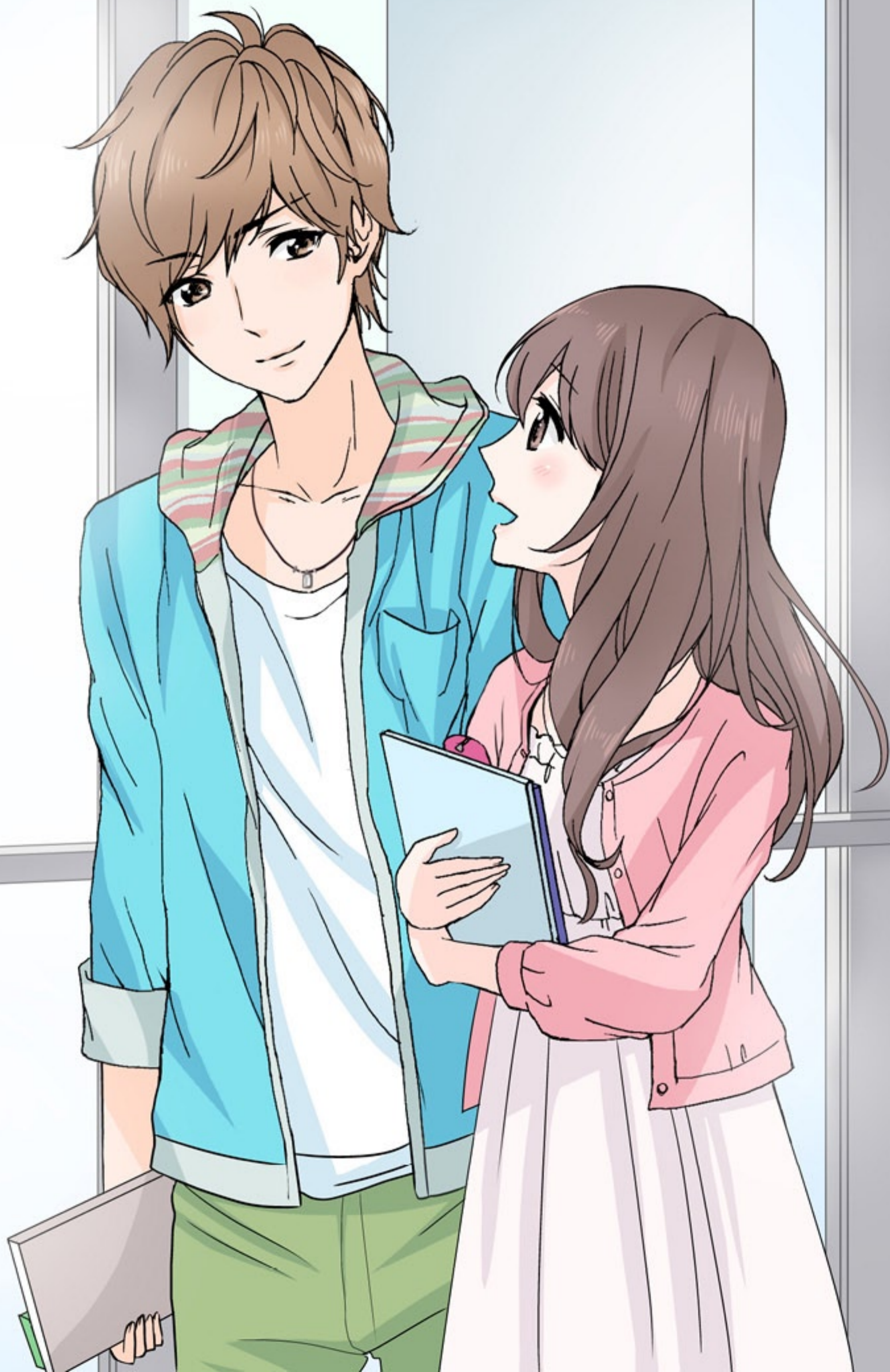
玲人は悠一の、
二歳年下の弟だった。



事件が起きたのは、

悠一とわたしが大学二年生、
玲人がまだ、

高校三年生のときだった。



「今から来てほしいんだ。踏切の公園のところ。待ってるから」

改まあらたって悠一に呼び出され、
わたしは、動揺していた。

告白、されるのかもしれない。

ちゃんと付き合ってほしい。

そう言われるのかもしれない。

足がすくんだ。

幼馴染の境界線を飛び越えたら、
その先になにがあるのだろうか。

不安な気持ちで家を出たところ
で、偶然、玲人に会った。

「ねえ、ハル。いまから共犯者
にならない？」



ずっと、ずっと一緒にだった。

幼い頃から、ずっと傍そばにいた。

悠一と玲人とわたし、

ずっと三人で。

それなのに、どうして。

どうしてなのだろう——



そして……

わたしたちの運命を変える、
あの事件が起きた……

「悠一が、死んだ」



兄・悠一と春香はるかの間を引き裂いたのは、弟の玲人なのか――



春香が一途いちずに
愛していたのは……

「ごめんね、玲人……」



別れてもなお、
春香を見守り続ける
上司の鮫島。

「やり直せないか、俺たち」



死んだ兄・悠一の影をかかえ、
闇やみのなかで生きてきた、
弟・玲人と春香。

そして、上司・鮫島の過去の
告白にめぐりこいて……

春香は、真実の愛に、
生きられるのか……



『傷跡に口づけを』

逢見るい／作

七色風香／絵

©2015 逢見るい / 七色風香

©parsola inc.